

じほう論説 「幼児期を幼児期として」

－遊びと環境，記録と省察－

鳴門教育大学 木下 光二

幼児教育は、新しい局面を迎えようとしています。変わらざるを得ないもの、変わらずに残したいものがあるように思います。幼児が見つめる瞳の先はいつの時代も変わっていないのではないのでしょうか。

幼児の世界は、みずみずしさそのものです。蟻の行列をじっと眺めていたり、蝶や小鳥の飛来にぱっと眼を輝かせたりできる力を身に付けています。幼児期とともに過ごせる保育者の仕事が、どれほど尊いかです。私自身、幼児の世界に触れられた経験は、教育観の変容はもとより、人生の宝物になりました。ただ、全てが順風満帆だったわけではありません。幼稚園に勤めた当初は教育要領の用語はもとより、環境や遊び、教育課程などの言葉に内在する意味や意図なども理解できませんでした。自身の保育を振り返り省察することで、1つずつ学ばせてもらいました。

幼児期の遊び

幼児教育の本質は環境を通じた遊びにあります。身体全体で対象に向かい夢中になって遊ぶ時、見たり触れたり感じたり考えたりしながら五感を精一杯に働かせます。失敗や試行錯誤を重ねながら、時間を忘れて没頭している姿こそ遊びの本質です。その際、何をして遊ぶかよりも、遊びをどのように作り出すかということが大切です。

例えば、園庭の机の上に置かれた様々な果物、草花、クレープ紙などでの色水遊びをよく目にします。たっぷり遊び終えた後、幼児たちはとても満足そうに見えます。しかし、ここで大切なのは、幼児がどれだけ園庭の草花や木の葉などの環境に自ら働き掛けたかにあります。もしも保育者が準備したものだけで遊んでいるとしたら、それは少なくとも遊んでいると言えないのではないのでしょうか。幼児が自らつくる遊びには、何をして遊ぶ、誰と遊ぶ、いつから遊び始める、いつまで遊ぶ、どんな材料や道具を準備するか、どこにあるのか、どれくらい必要なのかなど、考えなければならないことがたくさん生じます。遊びが思考を深め、イメージや学びの芽生えを形成する由縁がここにあります。

遊んだ後の片付けにも、遊びの充実度や満足度を見ることができます。みんなで協力して片付けることも大切ですが、片付かないくらい夢中になって遊び込んでいることも、大切ではないかと思えます。「もう少し遊びたい…」「続きをやりたいから置いておきたい」などの声が聞こえてくることも必要ではないのでしょうか。それは決して決まりや約束を破ることではないように思います。遊びにのめりこむ、浸る、時間を忘れるのような経験は、幼児期にしかできないように思うのです。遊びの本質を見極め、遊びについて考えてみるのが大切ではないのでしょうか。

遊びと環境

幼児期にしかできないこととは何でしょう。それは、幼児自ら環境に働き掛け、環境の発する信号を身体全体で受け止めることではないでしょうか。その際、植物や生き物、水、砂、土、泥、風、雪、雨などは、自然がもたらしてくれるかけがえのない教材です。

ある雨の日の園庭で、傘をさし長靴をはいて、にこにこしている3歳児の姿を見かけました。その様子を見た他の3歳児も園庭に出て、暫く傘に当たる雨音を楽しんだ後、ぬかるんだ土の所で足を止めました。長靴の足跡をつけて遊ぶ子、傘の先で土に穴を空ける子、傘を逆さにしてくるくる回し、「穴がおっきくなった」と喜んだりするなど、様々に遊ぶ姿がありました。やがて保育者も加わり、傘の先で空けた穴をつないで絵を描く遊びへと広がっていきました。ぬかるんだ園庭がそのままキャンバスになったわけです。雨が降ったら遊べないというのは大人の独りよがりであり、幼児には幼児なりの雨の日の遊びがあることを教わりました。

私が勤めた幼稚園の園庭の中ほどには、桜や樫、シンジュの木などが点々と植えられていました。四季を通じて幼児が花びら摘み、蝉とり、落ち葉拾い、かけっこ、なわとび、ボール遊びなどに興じます。外遊びが気持ちよい季節には、木々にロープを張り巡らし、巧技台や平均台などをつなげてアスレチックをつくります。普段は何もない空間に、新しい遊びが姿を現します。中でも木々の間に上下に張られた2本のロープ渡りは圧巻で、腕や足の力のもとより、身体全身の力をふりしぼって挑戦する姿が見られます。狭い園庭を活用し、幼児が夢中になれる遊び空間を創り出す環境構成に驚きました。かつて、この場所に木々を植えた先達の先見の目に感心させられるばかりでした。

環境は幼児教育の生命線であり、幼児の感覚や感性、身体全身での遊びや運動、柔軟な発想や科学的な思考、異年齢が交わる協同的な遊びなどを育む重要な役割を担っています。どんなに科学技術が進歩しても、自然に勝る教材（環境）はないのかも知れません。幼児期にふさわしい遊びと環境があるはずです。幼児期を幼児期らしく過ごすためにも、園庭の環境に見直し、魅力的な遊びが生まれることに期待します。

遊びと教育課程

教育課程の理解は、遊びや環境、幼児教育の理解そのものです。秋の深まった日、誰もいない園庭に二人の3歳児が出てきました。暫く散策した後、1本の木の下で立ち止まりました。一人が木を見上げ、「みーんみーんみーん…」と蝉の鳴き真似を始めると、もう一人も鳴き真似を始めました。季節柄、蝉はいませんが、夏の盛りにこの場所で鳴いていた蝉の姿が二人には見えていたのでしょうか。

もし、この園のこの場所にこの木がなければ、二人はこの場所で蝉の鳴き真似をすることはなかったでしょう。この場所で、夏に蝉を感じながら過ごした時間が、経験の履歴として二人の中に刻み込まれています。そして、蝉がいなくなった今でも、その時間は生きて時を刻んでいます。「みーんみーん…」はありふれた言葉ですが、この言葉が生まれた

背景には、園の文化として育まれている時間や空間、環境などが起因していることが理解できました。園に存在するすべてのものが教育課程をつくっている大切な要素です。教育課程はあくまでも指標にすぎませんが、教育課程に映し出される具体的な幼児の姿が何より大切であることを学びました。

教育課程は、地図や道しるべに例えることもできます。幼児の楽しい旅を保障するためには、すてきな地図が必要です。それぞれの園にはそれぞれの教育課程があり、その園しか生まれない言葉、行為、遊び、関係性、保育や環境があるはずで、保育の質を保証するためにも、教育課程を今一度見直し、再構成してみるのが大切です。

遊びと記録

幼児教育を正しく伝えるためには、保育の可視化と記録の省察が必要となります。その際、何をして遊んだ、何々ができるようになったということではなく、幼児のありのままの姿や行為、心情や状況の変化を詳細に伝えることが大切です。かつて、ベテラン保育者の水遊びの記録から学ばせてもらったことがありました。

「すいどう、すいどう」と声が聞こえてきた。リズムカルに唱和している。見ると、テーブルの周辺にいた男児たちのそれぞれの手が伸びて、テーブルの中心にある穴に砂を入れている。精一杯体を伸ばし、手を伸ばし、手の先は穴の方に向いている。何とか穴に砂を入れようと一生懸命。片づけの中から子どもたちの新たな遊びが始まっている様子を、私はそっと見守ることにした。次々に砂を握っては穴をめがけて入れている。

「こおり、こおり」という声も聞こえる。テーブルの下には円錐状に砂の山ができていいる。「氷、おもしろいね」と声をかけると、「かき氷」と言うユウキ。子どもたちの声はいつのまにか、「すいどう、すいどう」に変わり、湿った砂を穴に入れている。テーブルの上をなでるようにして手が動き、穴の方に向かっていいる。「すいどう」という言葉からイメージしたのか、タクマがバケツで水を流し入れた。砂と水が混じって机の上はどろどろになっているが、手のすべりはよい。水混じりの砂を集めるようにしたり、水を押し込むようにしたりして穴をめがけていた。
(一部抜粋)

どこにも、「楽しそうに」「いきいきと」「イメージ豊かに」等の言葉は使われていませませんが、遊び込んでいる様子が伝わってきます。それは、遊びを捉える視点が細やかで、「それぞれの手が伸びてテーブルの中心にある穴に砂を入れている」「精一杯身体を伸ばし、手の先は穴の方に向いている」「テーブルの上をなでるようにして手が動き」「手のすべりはよい」「水を押し込むようにして」のように、身体の動きはもとより、手の先や手のすべりまで捉えているからです。身体の動きは心の動きを現します。ほんの瞬間に、保育者が何を見、何を理解するかが、遊びをつくり、遊びをみとる上で重要です。

「新たな遊びが始まっている」という記述にも目がとまりました。テーブルの穴から落ちる砂を水道に例えている幼児の遊びを新しい遊びと捉えています。新しい遊びとは、夢中になって遊ぶことから生まれた、どこにも見られないオリジナルな遊びです。どの園に

も、日常の中にこのような遊びがたくさん生まれていることでしょう。たかが遊びですが、されど遊びです。遊びを記録し省察する経験を重ねることで、遊びをつくり遊びを育てることも可能になっていくと思います。せつかく生まれた新しい遊びが消えてしまわないように、記録に残し共有することも大切です。記録の蓄積は遊びの蓄積であり、やがてその園にしかない文化、教育課程となっていくことでしょう。

遊び込みから学び込みへ

最後に連携と接続のことに触れたいと思います。幼児期から児童期につながなければならないものは、生活習慣や自発性、話を聞く、気持ちを伝える、友達と仲良くするなど、たくさんあります。しかし、何より大切に思うことは、幼児期に遊び込める子どもに育てられているかどうかです。砂場で夢中になって遊んだり、虫や花に感心を持ってかかわれたりできる幼児は、生活科や理科の学習にすっと入れるでしょう。また絵本や物語の世界に没頭できる幼児は国語の学習に、数量や図形に興味を示し、折り紙や積み木などで時間を忘れて遊べる幼児は算数の学習に滑らかに移行できるでしょう。遊び込める子は学び込めると思います。それぞれの園で遊び込める幼児を育てることが何よりも大切であり、幼児期の環境と支援は、そのためにあるのだと思います。

時代はまさに連携から接続へと移行しています。幼児期から児童期へと交流活動はもとより、教育課程でつなぐことが重要課題です。幼児期と児童期、それぞれ充実したものの同士がつながることに意味があります。幼児期の良さと児童期の良さ、両者の良さを合わせれば、もっとよい教育が生まれるはずで。そのためにも、まずは幼児期を充実させること、遊び込める子どもを育てることが大切です。日本の未来は幼児教育にかかっています。幼児期にふさわしい環境を整え、幼児期らしい遊びを育み、幼児期を幼児期として過ごせる教育が展開されることを願ってやみません。私自身、できることに邁進したいと思いません。

参考資料

- 「遊びと学びをつなぐこれからの幼小接続カリキュラムの作成」 チャイルド本社
 - －事例でわかるアプローチ&スタートカリキュラム－ 木下光二 2019
- 「育ちと学びをつなげる幼小連携」 チャイルド本社 木下光二 2010
 - －小学校教頭が幼稚園にとび込んだ2年間－
- 「幼児期の教育と小学校教育との円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」
文部科学省報告書 2010
- 「幼稚園じほう」全国国公立幼稚園長会 2011,2012
- 鳴門教育大学附属幼稚園、附属小学校研究紀要